藤本 壮介

Fujimoto Sou［建築家、藤本壮介建築設計事務所代表］

分断された多様な社会を一つにつなぐシンボルとしてのリング

CONTENTS

特 集：躍動する大阪・関西を彩るライティング

SPECIAL INTERVIEW
藤本 壮介 氏 …… 1
東海林 弘靖 氏 …… 3

SPECIAL EDITION
2025年日本国際博覧会 大阪・関西万博 …… 5
大屋根リング …… 7
大阪ヘルスケアパビリオン …… 9
パナソニックグループパビリオン「ノモの国」 …… 11
東ゲート／ 西ゲート …… 13
Osaka Metro中央線 夢洲駅 …… 14
グラングリーン大阪／うめきたグリーンプレイス …… 15
天保山大橋 …… 19
関電ビルディング …… 20

くらしは文化
太陽の塔 …… 21

＊本誌では略称を用いています。また、一部敬称は略させていただきます。
表紙写真：大阪・関西万博 大屋根リング　撮影：楠瀬友将

万博の意義を大屋根リングに込めた

― 万博の意義をどう捉えられていますか。

大阪・関西万博の会場デザインプロデューサーを担当するお話を頂いたのは2020年の春頃でした。受けるためには、自分なりに納得する意義を見いだす必要がありました。現在は社会の分断が激しく、各地で紛争も起こっています。このような状況で万博を開催することには、従来とは違った意味があるのではないか。世界の約8割、158もの国や地域の人たちが文化や伝統、その土地の美しい自然の記録、さらに未来のビジョンまでを持ち寄って一つの場所に集まり、6カ月間ともに過ごすことに大きな意味があると思います。これまでの万博は未来の見本市のように捉えられがちだったのですが、現代では、多様性をリスペクトしながら、つながって行くことが重要になっており、実空間で会うという重要性はより大きくなっています。会場のデザインにあたって、多様な世界がつながり、一つになるメッセージを発信し、ダイレクトに体感できる場を追求しました。さまざまな検討を続けて、たどり着いたのがリングなのです。円は、その形そのものがとてもシンプルで強いメッセージ性を持っています。しかし、単に丸い万博会場を造るだけなら魅力的な体験は提供できず、メッセージも伝わりません。そこで、1周約2kmのリング状の構造物とし、3.6mのピッチで柱が並ぶ木造建築を計画しました。巨大な建築物として大きなメッセージ性を持っていますが、人を排除するのではなく、人を包み込み、そこにいると誰もが幸せになれるような環境をめざしたのです。

藤本 壮介 氏

1971年北海道生まれ。東京大学工学部建築学科卒業後、2000年藤本壮介建築設計事務所を設立。2014年フランス・モンペリエ国際設計競技最優秀賞（ラルブル・ブラン）に続き、2015、2017、2018年にもヨーロッパ各国の国際設計競技にて最優秀賞を受賞。国内では、2025年日本国際博覧会の会場デザインプロデューサーに就任。2024年には「（仮称）国際センター駅北地区複合施設基本設計業務委託」の基本設計者に特定。
主な作品に、ブダペストのHouse of Music (2021年)、マルホンまきあーとテラス 石巻市複合文化施設（2021年）、白井屋ホテル（2020年）、L'Arbre Blanc (2019年)、ロンドンのサーペンタイン・ギャラリー・パビリオン2013 (2013年)、House NA (2011年)、武蔵野美術大学 美術館・図書館 (2010年)、House N (2008年) 等がある。

相矛盾するものが融合し、豊かさを生み出す

― リングはどのようなメッセージを持っているのでしょう。

私は北海道の田舎で育ったので、子どもの時は自然の中で遊んでいました。自然と建築の関係は私のバックグラウンドにあり、自然が持つ圧倒的な多様性や快適性に、建築はまだまだかなわないという意識がどこかにあります。しかし、自然と建築が融合することで、より魅力的な未来が創れるのはないか。今回万博に関わることで、自分の中で意識化されたことは、人間の活動は多様で、それぞれが異なること。それは人間社会の魅力でもあります。異質な人たちが同じ場所に共存できる場ができれば、より魅力的になるのではないか。相矛盾しているものであっても、生態系や地球環境の下では調和を保つことがありますし、人間社会も各個人の考えは異なっていても同じ国や文化であれば一つになったりしています。逆に言えば、世界という一つの共通のものの中でつながる場合でも矛盾をはらんでいる。それ故に豊かだとも言えます。本来、人びとの考えや行動はバラバラで多様であって良いしリスペクトされるべきものですが、何かのきっかけでつながるという体験は、とても尊いのではないか。そのシンボルとして大屋根リングを捉えたのです。

ライティングが会場に命を吹き込む

― 照明ディレクターに東海林 弘靖氏を指名されましたね。

自然光の魅力は、天候や太陽の動きによって時間とともに建築の表情がダイナミックに変化することです。建築は動かないので、建築に命を吹き込むのは太陽、それと人間です。太陽と人間という自然が動くことで、初めて建築に命が与えられるのだと思っています。しかし、生活時間の半分は夜が占めています。夜の建築に命を吹き込むのは人によるライティングで、自然光では絶対なしえないことが可能です。これから夜の時間は人にとってますます重要になってきます。そのため、夜も素晴らしい万博にしようと考えたのです。
東海林さんとは以前から多くのプロジェクトをご一緒させていただいていますが、非常にポジティブで、状況を面白がりながら新しい提案をされる方です。日本を代表するライティングデザイナーの一人でもあり、会場全体の照明デザインをお願いしました。
東海林さんから提案された照明コンセプトは「新しい夜」。都市景観や人の活動がどのように明かりとともにあるか、東海林さんが今まで考えてこられた照明デザインや都市景観への思いがそこには込められていると思います。これまでの万博でも、夜まで開催していましたが、今回ほどシンボリックで美しい夜の風景はなかったと思います。照明デザインの方針としては、消費エネルギーを抑えながら、より魅力的な夜の景観を創り出すこと。大屋根リングの屋上は通路になっていますが、光が上空にこぼれる光害を起こさないように、照明器具を横方向に向けて路面を照射しています。その光をコンピュータ制御で季節や時間によって変化を与えて、繊細な光の動きを創り出しています。また、大屋根リングの上部と下部も美しくライティングされています。巨大なリングの中で各国のパビリオンが独自の照明をしているのですが、ある意味では多様な命のような光を放っています。それが光るリングで囲われ、にぎやかさが一つにつながった時に、大きな生き物のような光景を創り出しています。光が一つにまとまった会場中で人が動くことで、全体が生きている細胞のようにも見えるのです。
多様でありながら調和を生み出しているこの景観が、皆さんの記憶の中に50年、100年と残っていけば良いなと思っています。

※P8のQRコードから、インタビュー動画をご覧いただけます。

東海林 弘靖

Shoji Hiroyasu［照明デザイナー、LIGHTDESIGN INC.代表］

生きている証でもある明かりで豊かな「新しい夜」を創り出す

照明は命のシンボル

— 照明に対してどのようにお考えですか。

建築照明に携わり、2000年にLIGHTDESIGN INC.を設立して約10年が過ぎた時、東日本大震災が発生しました。高度経済成長期に普及した蛍光灯は、明るく豊かな「新しいくらし」のシンボルでした。ところが震災後は、東京でも計画停電や間引き点灯、夜間照明の消灯などが進められ、「ムダな光」は消されていきました。当時は「照明デザインという職能すら不要なのではないか」と思うような暗い夜が広がる状況でした。そんな折、NHKのドキュメンタリー番組の取材がありました。震災前から決まっていた企画でしたが、局内で国民に勇気を与える番組だと残った企画だそうです。企画は、照明デザイナーである私がパプアニューギニアの電気のない島に渡って、人間にとって照明や光はどんな存在であるか、感じ取って来るという内容。その島では、ヤシの実から取ったわずかな植物油を灯して子どもたちが1ルクスほどの明かりで勉強をしていました。最終日にディレクターが私に「この島における照明とは何か」を村の長老に聞いて欲しいと依頼しました。そこで尋ねたところ「この島には電気は来ていない。照明もわずかしか灯らないし、明るくはない。だけど、夜になって明かりが灯らない家があると、心配になって走って行き、どうしたんだと尋ねる」とのこと。「無事に1日を過ごせた感謝の気持ちを込めて夜に灯す明かりは、そこに今日も命があるしるし」だと仰いました。東日本大震災で照明の意味を見失いそうになっていた私は、照明は明るさじゃない。命のシンボルだと教えていただいたのです。その感動は、その後の私の照明デザイン活動に大きな影響を与え、「LIGHT is LIFE」のコンセプトにもつながることになりました。

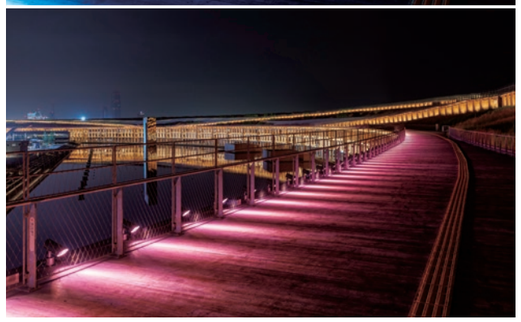
東海林 弘靖 氏

都市・建築照明デザインのコンセプトにLIGHT is LIFEを掲げる。照明は、生命の根幹にかかわる大切な環境要因であり、人間の暮らしの中で、心をいやしたり、勇気を呼び起こしたりする重要な要素と捉える。1990年より、アラスカのオーロラ、サハラ砂漠の月夜、パプアニューギニアの蛍の木など自然界の光に取材を続け、その光との出会いの感動を糧に、超高層建築からNICUまで、人間と光の本質的な関係を読み解きデザイン活動を行っている。IALD照明デザインアワードSpecial Citation、Award of Excellenceほか多数受賞。LIGHTDESIGN INC.代表。

「新しい夜」を創るための照明デザイン ガイドライン

— 照明デザインディレクターに就任されたお考えは。

2021年の秋に藤本壮介さんから照明デザインディレクターとして大阪・関西万博に参画して欲しいとオファーを受けました。大好きな建築家からの依頼でもあり、非常に名誉な仕事でこれからの時代の礎にもなることなのでぜひ受けたいとお返事しました。そしてすぐステートメントを発表しました。タイトルは「新しい夜を創る」。過剰なエネルギー消費を避け必要最小限の光で豊かな夜を実現するために、これまでとは違う新しい尺度の夜の時間の楽しみ方をテーマにしました。内容は大きく3つの概念でできています。一つ目は、夜の時間を分けること。江戸時代には「暮」「宵」「真夜」という時間帯で夜を区分していました。そこで、各時間帯の照明の在り方を工夫すれば、無駄なエネルギーを使うことなく、光を繊細に捉えることができ、美しく安定した夜が楽しめるようになるはずだと考えたのです。二つ目は会場全体を4つの照明ゾーンに区分し、静かな明るさのクワイエットゾーンを造ること。万博会場の中央にある静けさの森やウォータープラザなどはクワイエットゾーンとして動植物への配慮とともに、美しい光の景色を眺められる場所を造っています。三つ目は薄明視（はくめいし）の明かり。人は視神経の仕組みで闇に順応していく能力を持っています。それを利用すれば、ほの灯りでも不安のない良い光環境がつくれます。この3つの要素を中心として「新しい夜」と称し、具体的なアイディアも加えています。具体的には、大屋根リング屋上のスカイウォークでは足元の光を横方向に照射して歩行に必要な明るさを確保しつつ、光色や照度をゆったり変化させることで、脈々と躍動する演出としました。ここで用いたのは二十四節気。4月から10月を13シーズンに分けて色を決め、約2週間ごとに光色と動きを変えています。「ライトニングフロー」でシュミレーションした上で、最終的には藤本さんも一緒に現場で確認しました。また、会場全体の照明デザインのガイドラインを作成しました。使用する照明器具は空に光を露出しないように、直射光が隣地まで越境しないように、パビリオンは鉛直面やファサードを積極的に照らし、時間軸でのシーン変化を取り入れて欲しいなど、各ゾーンごとに照度や色温度など具体的な数字も示しています。大屋根リングの中には世界のパビリオンが入って美しい景観を創り出しています。できれば期間中に、これからの時代を映し出した「新しい夜」をご覧いただければと思っています。



大屋根リング屋上のスカイウォークの二十四節気に沿った照明演出。
大暑［空色：7月22日〜8月6日］（写真上）、秋分［茜色：9月23日〜10月7日］（写真下）

※P8のQRコードから、インタビュー動画をご覧いただけます。